

対象とする技術や制度の改革に加えて、それをめぐる経営や経済のあり方を地域社会、国家、グローバルそれぞれのレベルで検討する必要がある。東南アジアの環境研究を、これまで以上に多様な研究分野を包摂するものとして更新することが必須である。

第二は、環境研究において東南アジアを対象とすることの意義である。生態学において熱帯多雨林は研究のホットスポットである。気候学において熱帯域は中核的な研究対象である。熱帯多雨林や熱帯域を対象とした研究は、それぞれのディシプリン全般にインパクトを与える成果を上げてきた。東南アジアの環境研究も、それを支える関連諸科学を革新する潜在力をもつと思う。私たちは、より複雑で活発な自然と、より多様でダイナミックな社会の相互作用を研究対象としている。その知見に基づいてそれぞれのディシプリンをより強化し、強化したディシプリンを東南アジアの環境研究に持ち帰って応用するという循環を促進することが大切だと思う。地道に取り組んでいきたい。

(河野泰之・京都大学東南アジア地域研究研究所)

山本信人(監修)；宮原 暁(編著)、『東南アジア地域研究入門 2 社会』慶應義塾大学出版会，2017，xvi+336p.

勢いがある、というのが初読の印象である。本書は、山本信人監修による3巻シリーズ『東南アジア地域研究入門』の第2巻にあたる。第1巻『環境』、第3巻『政治』とともに、東南アジア地域研究がこれまで目指してきた複眼的理解(p. vi)を、三次元という簡潔な構成によって実現しようとしているシリーズである。第1巻は記述的理解の対象として、第3巻は構造的全体性を持つものとして、東南アジア地域を指定していることが、その部構成からわかる。それとは対照的に、第2巻では、地域という語が部タイトルにも章タイトルにも含まれていない。監修者の山本は、〈シリーズ刊行にあたって〉において、「東南アジア地域研究には普遍的理論体系がないので、確立された学問領域(ディシプリン)か、というといささか心もと

ない」(p. i)と吐露し、「東南アジア地域とは何かという問いは成立するのかを考えるのが、東南アジア地域研究である」(p. iv)と述べている。この不安と問いに、本書は一定の安堵と回答を与えている。各章は主に人類学を専門とする若手、中堅の研究者によって書かれている(p. 2)。以下で、各章のエッセンスを順に紹介しよう。

フィリピン華人を研究する宮原暁による序章は、東南アジアの社会文化を、コミュニケーションによって結びついた異なるロジックのモザイク状の広がりとして見ると同時に、民族誌的な比較が可能な領域として見るという二重写しの視座を示す。また、社会はコミュニケーションを生み出す運動、文化はそうした運動を生み出すロジックと捉えなおすことで、文化や社会が均質で永続性を持つという、素朴な見方からの脱却を図ると述べる。東南アジア諸文化の共通性ではなく、種としての人間が生存するために、遺伝子プログラミングに依存せずに、さまざまな行動や思考を創造したり模倣したりする能力としての文化を探るとしている。本序章は難解である。その原因の一端は、理論体系指向と超地域的傾向をディシプリンとする人類学による、東南アジア地域研究への貢献を理論化しようとしていることにある。

上ミャンマーの中国人ムスリムの研究をする木村自による第1章は、ローカルな社会の政治動態を詳らかにすることによって、「国民国家からなる世界」という像が、私たちを縛る虚像であることを照らし出し、人びとの想像力を自由することを示唆する。上ミャンマーにおける平等的で権力分散的な政治体系と階層的で中央集権的な政治体系をめぐる、説得力ある三理論(リーチの動的均衡論、ヌージェントのポリティカル・エコノミー動態論、スコットの逃避抵抗論)を提示した後で、中国ムスリムによる近代国家権力の戦略的流用を示している。

カンボジアを研究する小林知による第2章は、遍在する二つの生活の場、村落と都市の相補的対関係に焦点をあて、自らの二調査地①低地稲作村落と②タイ国境近くの丘陵地商品作物栽培村、の関係の繋がりによる村落(再)形成の現状を、分析的に提示する。①は、ポル・ポト政権によって一

度離散させられた村落であり、②は、かつて関係の繋がりを破壊した同政権の兵士たちと関係的に繋がった人びとからなる村落である。カンボジアで1990年代末以降同時進行する、国家形成とグローバル化の潮流の中で、①は近郊の都市と、②は国境を超えてバンコクや海外の市民や企業と繋がり、新たな村落—都市関係を発展させつつあることを示している。

フィリピンからイタリアへの家事労働移動を研究する長坂格による第3章は、東南アジアにおいて広く見られる「柔軟な双系制関係」「非領域的伝統的国家」「低人口圧」という条件が、高い移動性を可能にしたことを示す。国境を明確に画す近代国家の時代においても、柔軟な双系制関係が移動を容易にし、さらに、国家間における通貨交換レート差、モノの価格差などを利用して利益を引き出すために、移動を制限するはずの国境がかえって移動を動機づけているとする。また、イタリアへの家事労働者の移動を例にとり、条件さえそろえば、柔軟な双系制関係が、国際的移動を容易にすると説く。

フィリピンにおける臓器移植の研究をする島菌洋介による第4章は、「単系ではない双系制」や「構造の不明確なルーズな社会」という、消去法で把握されてきた東南アジア島嶼部の親縁性関係を、現地の人たちのロジックに沿って、キョウダイ関係でとらえる。キョウダイ関係は良き社会関係の範例となっており、血などの身体物質共有のイデオロムで語られ、共食などのプロセスによって累積されると述べる。生体間腎臓移植のドナーとレシピエントを見てみると、欧米や日本では親子である場合が多いが、フィリピンでは半分以上がキョウダイ関係にあり、新しいコンテキストのなかでも範例性が窺えるとしている。

インドネシア・スンバ島等を研究する小池誠による第5章は、スンダとスンバの村に関する自らのフィールド・データと東北タイの二村及びシンガポールについての文献から、東南アジアの結婚と家族の多様性と共通性を明らかにしようとしている。H.ギアツがジャワの家族の特徴として指摘した「母中心的な」特徴がスンダやタイにも見られること、マレーシアの農村研究から坪内と前田

が提唱した「家族圏」概念が、スンバの家族を分析するのにも妥当であると述べている。また、統計資料から、東南アジアでも都市化と少子高齢化が起こっていること、それが女性の就労に伴う晩婚化や家事労働者の国際移動と関連していることを、シンガポールとインドネシアについて確認し、結婚や家族の変化をもたらすであろうLGBTの市民権が、上記いずれの国でも容認されてないことを示している。

マレーシアのオラン・アスリ研究をする信田敏宏による第6章は、字義的には原住民を意味するオラン・アスリというカテゴリーの内包が一義的に決定されないことを、言語、生業、出自の多様性という点、イギリス植民地政府とマレーシア政府による法規定、著者の調査から得られた個別事例から示し、オラン・アスリがマジョリティであるマレー人との関係の中で規定されてきたことを示している。マレーシアにおいてオラン・アスリとされる人びとは、国の人口の1%にも満たないマイノリティであり、多くは森など経済開発の対象となっていなかった地域に暮らしてきた。独立以後、マレーシア政府は、彼らに対しイスラーム化と経済開発による同化政策を推進してきたが、1990年代以降、世界的な先住民運動の影響を受け、統一的な先住民アイデンティティを主張する運動も見られるようになったと述べる。

インドネシア華人女性や台湾に嫁いだ東南アジア人花嫁の研究をする横田祥子と在日フィリピン人の子どもの研究をする原めぐみによる第7章は、まず、東南アジアの女性、特に移動する女性に関する研究の広範かつ明快なレビューをしている。それに基づき、移動する女性たちにみられる、モラル・エコノミー、市場経済、フェミニズムなどの論理を流用した戦略、移動することによって生まれる複雑な周辺化の危険性を確認したうえで、国際花嫁斡旋が盛んな台湾へ嫁いだベトナム人女性たちと、伝統的なジェンダー慣習をものともしない新しいタイプのインドネシア華人女性についての調査データをもとに、女性たちが巻き込まれている或は自らが動員するロジックと表象、および彼女たちの生きざまを明らかにしている。

インドネシア・ブギス等の研究者伊藤真による

第8章は、国連によるグローバル・エイジングに関する指針を議論の出発点として、国連による統計資料をもとに東南アジア全体の高齢化の特徴を示している。シンガポールとタイの高齢化に対する取り組みについて社会参加に焦点をあてて述べたあとで、インドネシアの出生抑制のための政策から高齢者対策への政策へと歴史をたどり、インドネシアの高齢者の実態を全国統計をもとに示している。最後に、高齢者政策がシンガポールやタイと比べても遅れていると締めくくっている。

マレーシア華人研究をする市川哲による第9章は、東南アジアで交易を担ってきたにもかかわらず通常域外人とみなされる華人の視点から、マレーシア・サラワク州で生産される「ツバメの巣」の採取・交易の実態と2010年以降の変容を提示し、交易のネットワークが共有する論理を明らかにしようとしている。東南アジアは歴史的に交易の盛んな地域であり、ツバメの巣に限らず、生産／採取者集団にとっては価値を持たない物が、価値を見出す消費者集団に向けて、価値観を異にする複数の民族集団をつなぐネットワークによって取引きされてきた。そのような交易文化の一般論への貢献を、目指している。

フィリピン南部のスルー海域世界研究をしてきた床呂郁哉による第10章は、紛争・暴力とその処理について、一般理論研究と東南アジアを対象とした研究を検討し、著者自身のフィールド・データを丁寧に提示することによって、紛争や暴力の発現を民族や宗教の違いとする一元的な見方には留保が必要であること、紛争処理には、近代的でフォーマルな制度だけではなく、慣習や儀礼なども含んだインフォーマルな手段が重要であることを示している。

ジャカルタなど東南アジア都市研究をしている新井健一郎による第11章は、「東南アジア」と「消費社会」という二項が切り結ぶテーマを、多くの先行研究を参照しながら、「歴史」、「社会変化」、「自己実現」という観点から検討して明らかになる論点を提示している。「歴史」の検討は、冷戦が「東南アジア」と「消費社会」の（イメージの）定着にいかに関係していたか、「消費社会」の単位がどのように国に重ね合わせられたかを示す。「社会変

化」の検討は、消費の空間と消費者の生成を具体的に示し、地方出身者を吸収して急激に膨張する大都市において展開された、階層とジェンダー・セクシュアリティ規範の再交渉を提示する。「自己実現」の検討は、スハルト時代には、イスラム・ポップ小説消費を通じて、その後はイスラームのファッション化を通じて、高等教育を受けた女性が「自己実現」してゆくさまを、日本の事象と類比させて描いている。

フィリピン・カリンガ州山地民バシルの研究をしている尾上智子による第12章は、「遊び」と「中間領域」という語をキーワードに、以下の調査データを含めた事例と理論を連想で繋ぐ。バシルのある儀礼には言語での説明も名付けもされていないパートがある。そこでは、儀礼執行者とその助手の老婆二人が子供のようにふるまいながら、儀礼用に屠った豚の鼻、耳、尻尾、足首を通常なら奇妙と思われるやり方で扱う。この意味の空白部分こそ「遊び」であり、逆説的に、意味の源泉になっている可能性があるのではないかと尾上は示唆する。

タイの山地民族ラフや中国廟の研究をしている片岡樹による第13章は、タイにおける宗教的諸慣習と公的宗教認定制度の捻じれた関係について、アカ、ラフ、中国廟の事例を取り上げ、日本や東南アジアの他の国と類比しながら論じている。その捻じれは、タイが、西洋中心の国際社会に近代国家として認められるために、信仰belief、聖・俗分離、複数帰属の否定等を要件とする西洋的宗教概念を輸入し、現在でもそれが効力を持っていることに由来していると論じられている。

タイ・ムスリム研究をする小河久志による第14章は、世界的な動きと連動して東南アジアにおいてもみられる、近代化とともに進行してきた宗教の国家による管理と、1980年以降進展する宗教再活性化の動きを確認し、タイ国家によるイスラーム管理政策とタイ全体の再イスラーム化を把握したうえで、タイ南部・ムスリム村（調査地）の再イスラーム化が国家管理と順接的關係の中でダイナミックに進展していることを示している。このダイナミズムを理解することは、東南アジア、ひいては現代世界を理解することに繋がるとしている。

フィリピンの呪術と宗教等を研究している東賢太朗による第15章は、フィリピンの人びとによるカトリック実践の研究の視座を、フォーク・カトリシズムやシンクレティズムという視座が孕む権力的俯瞰性から解放して、実践する庶民たちの実感に即して探ろうとしている。取り上げられる事例は、地方都市での調査から得られた、フィリピン化されたコンパドラツゴ（洗礼時に形成される儀礼的親族関係）とカトリック教徒である呪医による在来精霊に訴える治療である。

語りかけるような文章で、的確に事例を例示しながら明快な議論を展開する第13章。膨大な文献を参照しながら、珠玉の長編推理小説のなぞ解きのように、鬱蒼とした現時事象の森に道開きをしてくれる第11章。一般理論を批判的に検討し、東南アジアの多くの事例を視野に入れてその特徴を炙り出したうえで、議論のために必要なフィールド・データを過不足なく提示して、説得的に論を展開している第10章。ポイントを絞った先行研究レビューから複雑な事象に取り組むための論点を定め、フィールドワークで得られた等身大の人びとの姿を提示することによって、読者、特に若い女性読者を惹きつけるにちがいない第7章。その他に手堅くまとめられた章もあり、入門者ではない私も、本書から多くのことを学んだ。しかしその一方で、あと少しの推敲で論点や論の進め方がより明確になったと思われる章も、数少ないながらも。後進の研究者の指針ともなる入門書という性質上、著者間のピア・レビューなどによって改善できていたらよかったと思う。改善点を一つ一つ指摘することは、本書評ですべきことではないので、以下においては、本シリーズの主題であると同時に、監修者の不安と問いの主題でもある、「東南アジア地域研究」に論点を絞り本書全体について述べよう。

東南アジアという名づけは、広域のヘゲモニー権力が成立したことがなかったその地域全体を日本軍が掌握したことがきっかけとなって、アメリカを中心とした列強による外部からの投影として1940年代にはじまった。「東南アジア」成立のこのような経緯からして、この地理的空間に必要な属性がないとしても驚くことではない。本書

のなかで、「柔軟な双系制関係」「非領域的な伝統国家」「低人口圧」「家族圏」「キョウダイ関係」などが東南アジア的な属性を示すものとして取りあげられているが、これらは東南アジア全体に見られるわけではないし、東南アジアだけに見られるわけでもない。したがって、こういった類型を無批判に準拠点とすることは、東南アジアの諸社会の生の現実を理解するうえの妨げともなりうることに、私たちは自覚的であるべきだろう。これらの類型論を批判的にレビューして、脱構築する議論を序章で展開していれば、本書の貢献はより大きくなったと思う。この辺の地域に何らかの傾向がみられるとしても、それは、「家族的類似」によるものであり、その場合も、東南アジアの境界によって画されるものではないだろう。

戦後に入ると、当初アジアの残余的な位置づけでしかなかった「東南アジア」が、冷戦の観点から東西陣営のヘゲモニーが争われる場となり、軍事的政治的関心だけではなく、人道的など多様な関心を引きつけるようになった。一方、戦後独立した国家の国民統合とASEANなどの国家間連携が進展し、東南アジアというカテゴリーが、国際的政治システムのなかでは、名乗りとしても使われるようになった。マクロな政治経済的観点からは、東南アジアは輪郭をもつ実体、或は集合的に意味ある想像物となったのである。しかし、本書のテーマである「社会」という観点からは、東南アジアは依然として輪郭を与えてくれるものではない。序章で言われているように、社会をコミュニケーションを生み出す運動とするなら、なおさらである。

では、社会や文化の研究にとって、東南アジアというカテゴリーは意味をもたないのだろうか。研究対象としての「東南アジア」は、上述の軍事的・国際政治的カテゴリーの成立とほぼ同時期に始まり、戦後冷戦期に大学制度として実体化され、多様な関心を抱いた、多様な政治的立場にある、多様な出身国の学生や研究者がそこに集まり、互いに切磋琢磨し、豊かな実りを生んだとアンダーソンは述べる。また、そのような状況のなかで、ディシプリンや焦点となる関心地域がどうであろうと、学生や研究者は「東南アジア」を範囲とする

比較の眼差しを多少とも持つことになり、それが豊かさを支えたと指摘する。以上のような研究作業上の地域枠、方法論的地理領域として、「東南アジア」は、社会や文化の研究にとっても重要であろう。

では、主として人類学の若手研究者たちによる本書の意義は何だろうか。一つには、特定地域に関する新鮮な視点からの考察が、人類学の視座を東南アジア地域研究にもたらすと同時に、人類学にとっても資するものとなっている点である。さらに特筆すべき点は、著者たちが、東南アジアにおける、或は、国家におけるマイノリティを主な研究対象とし、フィールドワークをしていることにより、世界地図によって想像されるような安定調和的な東南アジア像や世界像とは異なる、現代世界を生きる人びとの動的なリアリティに迫るものとなっている点である。私を印象付けた「勢い」は、これに由来しているといえよう。

最後に、序章を含め全16章のうち、女性によって書かれたのは、女性を論じた章を含め計2章であることを指摘しておく。

(青木恵理子・龍谷大学社会学部)

参考文献

アンダーソン、ベネディクト。2005。『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』糟谷啓介他（訳）。東京：作品社。（原著 Anderson, Benedict. 1998. *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia and the World*. London and New York: Verso.）

山本信人（監修・編著）。『東南アジア地域研究入門 3政治』慶應義塾大学出版会，2017，xvi+321p.

東南アジアの政治を学ぶための日本語のスタンディ・ガイドの出版が最近増えている [例えば、岩崎 2017; 清水他 2018; 中野他 2016; 中村 2012]。本書はその喜ばしい潮流のうちの1つであり、「東南アジア地域研究の軌跡をたどりながら、東南アジア地域研究の現状とゆくえについて考え」(p. ii) するために編集された3冊のうちの「政治」編であ

る。内容は東南アジア政治研究の系譜を概観する序章と、それに続く4つの部からなる。各部は1章1テーマを扱っている3から5の章で構成され、それぞれの章を若手・中堅の気鋭の研究者が執筆している。各部の構成は以下のとおりである。第1部「時空を超える地域」では、時間（第1章）、空間（第2章）、境域（第3章）というテーマが取り上げられている。第2部「国民国家からみる地域」では、政治変動（第4章）、統治（第5章）、政治と軍（第6章）、政治経済（第7章）、地方（第8章）に関する研究が紹介されている。第3部「連携する地域」においては、地域機構（第9章）、非伝統的安全保障（第10章）、市民社会（第11章）の各テーマが検討され、第4部「越境する地域」では、宗教（第12章）、紛争（第13章）、移行期正義（第14章）という章が設けられている。

本書が想定する読者層は、「卒業論文のテーマに苦慮している学部専門課程の学生、東南アジア地域研究を極めようと志している大学院生、東南アジア地域研究の現状とゆくえに関心を持つ社会人やメディア関係者」(p. vii) で、大学専門課程学生から研究者までの層をターゲットとしている。それに合わせ、各章の記述内容は（章によりばらつきはあるが）事象の説明よりも研究解題に対しより多くの紙幅が費やされている。前掲の類似の入門書がほとんど日本語の参考文献しか掲載しておらず、初学者を念頭においた作りになっているのに比べると、本書では主に外国語文献を紹介しており、ここで紹介されている研究を踏み台にして新しい研究を行いたい人向けの著作と位置付けられる。

本書評では、「東南アジア地域研究の見取り図」(p. vi) の提示という本書の目的に則した評価を試みたい。まず、本書の第1の特長は、編者が述べるように「通常は歴史学や人類学の領域と類別されるようなテーマ設定」と「国際関係論や比較政治学的なテーマを織り交ぜ」(p. 22) しているところにあると言える。一般的に、東南アジア政治の教科書的な著作には3つのタイプがある。各国ごとにその政治的特徴を紹介するもの [清水他 2018]、歴史の流れの中で東南アジア諸国をあわせて記述するもの [岩崎 2017; 中野他 2016]、そして、分析